

# 「日本幼児保育史」研究余滴（二）



長 玲 子

雨の上った六月の夕べ、保育史の出版記念祝賀会の一ときを、私は、十余年の「時」をタイムマシンで戻って来たかのような、夢のような気持ちでございました。山下先生の御挨拶、村山先生の経過報告が岡田先生の司会で進む間、私が抱いた感慨は、諸先生方とは別のものだったと思います。二十年に及ぶ息の長い研究を、御多忙の中でなすとげられた先生方の御苦勞と充実感、私などと比較出来ないことと思いますが、平凡な一学生であった自分が、その中に加えていただき、ささやかな発掘をなし得たのかもしれない……と胸に溢れるものを感じないではいられませんでした。「私の青春は、この保育史の中に残っている」等と多分の感傷にひたったのも、十年も先生方とお目にかかる機会さえなく、三児の母親としての煩雑な日常生活にのみ追われている現在だからかもしれません。

ですから、この原稿を書くにあたって、ためらいがありません

た。研究の苦心談、というより、どうしても、私自身にとって保育史の研究がどんな意味をもっていたのか……ということになってしまいうで。が、研究につながることもなんでも……とのことで思い切って筆をとりました。



日本女子大児童学科の三年生の終り、卒業論文のテーマと指導教授を決める折、村山先生の研究室に伺ったことが、幼稚園史研究にたずさわったきっかけになりました。何より、こまかな統計や数字が苦手でしたので、心理学のテーマをさげ、「児童観の変遷」を勉強したい旨お願いに上りました。先生がさり気なく、「ギリシャ、ラテン語がわかるといいんですけどね。せめてペスタロッチやフレイベルの原著が読めると。僕には自信がありませんが、あなたは出来ますか」と仰言ったのにびっくりし、三十分後

に退室する時は、「幼稚園の歴史的考察」ということになっていました。息こんでいたのに、いつの間にかテーマがかわり、その上たさんの幼稚園に関する参考書を拝借するはめになって、数か月は仕方なくそれ等を読みつづけました。その間、保育史の小委員会のことを伺い、「幼稚園史は、専門の先生方が手分けして目下研究中な程よくわかっていないので、ほんとの第一歩から」と、いよいよテーマは「初期の幼稚園」にちぢめられてしまいました。(何しろ、指導教授の仰言することは絶対だと信じこんでいましたし、先生方にさえわかっていない、とあつては学生としてはいたしかたありませんので) 初めの意図と違うので、どうも心ひかれなまま幼稚園教育史をつめこむに従つて、その歩みは、明治維新の中から生まれながら、小中学校と別種のものではないかと考えはじめました。各地での生まれ方、育ち方が、各々違うらしいのに、倉橋、新庄先生の著になった「女子師範幼稚園」以外は、あまりはつきりしていません。関西の地に育った幼稚園の方が大きな意味をもつのではないかと等と気づきはじめました。おそろおそろ先生にそれを申し上げると、先生は資料を求めて関西の古い幼稚園を廻る御予定で、お伴してもよいとのこと、秋休みを利用して、七時間の旅をしました。この時、「学生は、論文など書こうと思わないでいいんですよ。学問のし方、態

度だけ学べればいいのです」と言われて、目からウロコが落ちた思いでした。生涯、覚えていようと思いました。

◇ ◇ ◇

伊勢湾台風の直後で列車の窓から水につかった屋根の上の人々や、牛や豚の死骸をみたのも昨日のようです。山科の御親戚からの先生と、豊中の従姉の家からの私と、毎日十時にデイトして夕方まで、あちこち歩き、夜は写した資料の整理という五日間でしたが、その結果が、愛珠幼稚園と柳池幼稚園の姿を浮かび出させてくれました。その頃の日記にこうあります。

十月一日。十時、淀尾橋北口改札口。ビル街の中に、武家屋敷のような瓦葺の幼稚園におどろく。津村園長が、歴史に興味をもたれ、何年かかかって大変よく整理された貴重な資料を、先生と書庫にもって写す。先生が『あれも』『これも』『次々ひき出していらっしやるのを、一字でも多く、とただ写す。当時の人たちが、いかにつよい理想にもえてここに幼稚園を開こうとしたかを、『明治十三年』等という虫喰いの著に知って感動する。

二日、三宮ホーム。頌栄幼稚園と神戸幼稚園。静かな山の手の街。私にははじめての神戸だが、ただただ先生と頌栄女子大の図書館にて写す。キリスト教系の資料多い。

三日、六甲駅ホーム。六甲登山の一団をみながら、六甲幼稚園と、その昔スラムに建てられたという善隣幼稚園を訪ねる。どちらも戦災にあつて新園舎になつてゐる。

五日、再び愛珠。『僕はへたですから』と先生に言われ、きらいな絵だか遊具など描く。掛図、カルタなど手製の色彩はまだ美しい。夕方、松蔭女子大の西本先生にゼンザイをこちそうになつた。やつとはつとしたとき。

六日、先生は柳池幼稚園にまわられるとのことだが、さすがにつかれて、ご勘弁願う。帰京したら、疲れが出て、二日間ねこんでしまふ。」

私にとって、はじめての研究旅行は思った以上の疲労でしたが、生の資料に接した感動も大きいものでした。愛珠、頌栄の整理をして登校した日、「いいものをみつめました」と先生からぶ厚い風呂敷包みの中をみせられました。柳池幼稚園の三十―三十二年の保育案や、三市連合のパンフレットの綴りで、これらを見たとき、私の中に、本当に一生懸命とりにくみたい、という気がおきました。「柳池で、これ等が屋根裏みたいなところに無雑作にあるので、散逸すると思つて借りて来ました。黙つて持つて来てしまったのもあるので大急ぎで写して返しなさい」と声をひそめられたのを覚えてゐます。丁度その頃、女子大にコピーが

入り、当時は新式のそれに大勢が殺倒しましたし、「保育案」はいつ返却を催促されるか気が気でなく、早く登校したり、夜遅くなつたりで、先生と作業しました。

水にぬれて出て来る毛筆で細かな絵まで入つた保育案をあちこち干し歩き、数冊分がコピー出来たときはほつとしました。それををにらみながら、当時の保育の様子や保母たちの意図した事、子どもの反応等々、何か少しでも多くをさぐり出したいとミステリーを読むような心の昂りさえ感じたことをなつかしく思い出します。先生は、あくまで資料を先入観をもつて扱わない事、必ず、数字を使って説明出来るように整理することをきびしく言われましたので、「説話」の回数や、それが展開されて手技や遊嬉にどう扱われるか「正」をつけたり、ソロバンをはじいたりがありました。何とか保育の様子をすっきり表わしたい、保育内容の変化も、恩物が減り、唱歌や遊嬉が増加していく様子を数字で示してみたい、と頭をいためました。今まで、著書を読むだけではなぜかはつきりしなかつた「初期の幼稚園の姿」が、いつしか私の中に形をとつて来て、愛珠幼稚園や柳池幼稚園の保育の様子が目に浮かんで来るような気がしました。遠い明治の初めのころ、ランプの下で、細い筆の先でこれらの保育を記した束髪の保母たちが語ってくれることをつかみとろうとする事は、本当に楽し

くなり、幸せな気持ちさえました。とくに、関西の気風、民衆の感慨のようなものに興味を持ち、また感動させられました。お茶の水幼稚園が恵まれた官製の優等生なら、愛珠や柳池はなんと逞しい臨機応変の姿だろう、と目を見張る思いでした。町の人々の非難や誤解をとくため、お稻荷さんをまつて拝んでみせた愛珠創設者たちのしたたかさや、大型積木や砂袋を遊具として開発していく様子に、「明治時代は堅くるしく不自由の時代であり、女性はいかよわかった」のではないことを教えられました。開設時は酒をぶらさげた人々が見物に来た愛珠幼稚園は十数年にして、木馬をそなえ、鉄砲ごっこをし、郊外遊戯を行なうようになるのを知って、そこで働く保母たちの努力と知性の高さを思いみる気がしました。ここでは、恩物はほとんど減り、「幼児には適せじ」として「読ミ書キ」は徐々にやめられるなど、思い切った保育が行なわれますが、その根底に、たゆみない保母の研究心と幼児を愛する心があったことを思われました。交通の不便な時代に、「女子師範幼稚園」に学びに行き、やがて三市連合研究会を誕生させる、このような名もない現場の人たちによって幼稚園教育は培われて来たのだ——と、その素晴しさがわかったような気がしました。そして、関西の幼児教育は、この時代常に、十年、東京より進んでいたのではないだろうか、後の三市連合研究会につな

がる動きを考えても感じさせられました。先生が、研究のはじめから、「関西」と何度も言われたことが、自分のこととして理解出来たように思います。



研究、というより、一学生として、先生の御教示に従って資料にとりこんで来ただけに、それを機に、小委員会の先生方と同居させていただき、いろいろお教えいただいた事は、何より嬉しかった事です。大学の先生というのは、試験や卒論をパスさせて下さるか否かの鍵をにぎるコワイ方々でしかなかった私に、先生方の若々しい討論の様子、新しい発見に喜ばれるお姿は、深く胸にのこりました。こつこつと、たくさんの資料に当たっていらっしゃる水野先生、夢中になって目を輝かせる岡田先生、もの静かに、ていねいに教えてくださる津守先生、はじめてお目にかかった時は、まだ、大学院の学生でいらした宍戸先生が、「どうも僕は結論を出すのを急ぎすぎて」と苦笑していらした事など、今も楽しく充実した思い出になっています。

卒業後、幼稚園教諭として、第一歩を踏み出したのも、幼稚園史にたずさわった事とつながっているかもしれない。が、明治の保母のような素晴しさを自分の理想としながらも、ただ追われ

ていたその頃、先生からお呼び出しを受けました。小委員会の研究が「幼児の教育」に掲載されるので、私の卒業論文を新たな資料も加えて書き直して見ないか、とのことでした。自信もなく、辞退したいのが本心で、ずい分ためらいましたが、「あの明治の保育案を陽にあててあげなければ……。明治の保母たちの姿を残しておかなければ」という気持ちの方が一方にあって、自分を励ました。それが更に「幼児保育史一・二巻」の立派な本に納めていただく、私には光栄という以上に、自分の役目を果せてよかったという気がします。虫喰いのまま、散逸されたりしないで、後の人たちのために残しておけてよかった、とその機会を与えられた事に感謝しております。

たまたま、村山先生に卒業論文の御指導をお願いに伺ったことから（初めの意図とまるで違っていましたのに）あまりにも多くの事を教えていただき、自分でも得る所が多かったのを幸せに感じています。いつの間にか、先生方に上手に乗せられ、先生の意図されたように進んでしまったのだろうか、と妙な気分にもなりますが……。

「ほう、僕は気がつきませんでしたか、どこにそんな傾向がありますか、もっと、はっきり探し出して下さい」「もっと、いろいろなことがわかりませんかねえ」と仰言られて頭をひねって伺

ったときこう言われました。

「女の人は、年をとると良いおばあさんと悪いおばあさんと二通りしかいなくなります。その別れ目は、若い時に、自分の頭を叩いてどの位考えたか、疑ったり、抵抗したかです。知的なトレーニングを受けない人間は若いうちにはカバーされていても、のびられませんか」

「わるいおばあさん」になりたくない一心で、ない知恵をしばった研究であり、私の中で一番充実していた数年間であったと、今しみじみ想いかえます。



長々と、とりめもない思い出で紙面を汚しましたが、先夕の一刻もこのような感慨にふけていました。十年ぶりにお目にかかった小委員会の先生方のお顔が、まぶしい思い出でしたが、また、出来たら、「わるいおばあさん」にならないために勉強してみたい、などと心にきめたりいたしました。

